

旅行案内 I (ヤンゴン、バガン、マンダレー)

(一社) 日本ミャンマー友好協会専務理事
中小企業診断士 都築 治

1 ヤンゴン

ヤンゴンはミャンマー第一の都市で、ミャンマーの首都でもあった。ヤンゴンは、古くからシュエダゴン・パヤーをいだける聖地ダゴンとして知られていたが、小さな村でしかなかった。ミャンマー最後の王朝コンバウン朝を創始したアラウンパヤー王は、1755年長いモン族との抗争の末ようやくこれを下し、当地を宿敵殲滅（戦いの終わりの意）と言う意味の「ヤンゴン」に改名した。

その後、1824年、52年、85年の三次に及ぶ英緬戦争の結果、ミャンマーは全面的にイギリスの植民地となってしまった。そして、この地は港湾都市としての立地の良さに目を付けられた。現在のヤンゴン市街の区割りされた碁盤目状の街並みは、イギリス統治時代の遺産である。ヤンゴンの都市計画を描いたのは、イギリス人のエンジニア、フレーザー中尉である。彼はシンガポールの都市計画を立てた人としても知られている。

また、ヤンゴンは「ガーデン・シティ」としても広く知られ、緑が豊かで、雨季明けにもなると、様々な花が咲き乱れるのが見られる。さらに、植民地時代の多くのビクトリア朝建物が、南国ムードを一層高めている。

市内はホテルやショッピング・センターの建築が急速に進み、車の渋滞が慢性化する程になっている。しかし走る車の多くは年代物で、この国の歴史と生活を如実に物語っている。



(1) ヤンゴン市内

ア シュエダゴン・パヤー

シュエダゴン・パヤーの高さは99.4m、基底部の周囲433m、付随する小仏塔の数は64を数え、圧倒的なスケールで参拝者を魅了する。ミャンマー仏教の総本山とも言える存在で、連日ミャンマー各地や各国からの参拝者が絶えない。

金色に輝くパヤーの最頂部にある聖傘は、76カラットのダイヤモンドを中心に総計5,451個のダイヤモンドと、2,317個に及ぶルビー、サファイア、翡翠などの宝石で装飾され、輝いている金薄板の総枚数は 8,688枚、60 t に及ぶとかつては見積もられてい

た。けれども、その先端は高過ぎて肉眼では識別することはできない。

シュエダゴン・パヤーの歴史は、2500年前まで遡ることができる。

その昔、インドを商用で旅していたモン族の兄弟が、釈尊が悟りを開かれ仏となったのを知り、ゴータマ仏陀に面謁し食べ物を供養して8本の聖髪を賜った。国に帰った兄弟は、モン族の王カーカウナティターに聖髪を差し上げた。王はすでに成道し、過去仏となられていた拘留孫仏、拘那含牟尼仏、迦葉仏のご遺物と共に、シングッタヤの丘に8本の聖髪を安置した。原初のパヤーは9m程度の高さであった。

その後、長い間ゴータマ仏陀の聖髪が安置されているのを知る者はいなかった。

釈尊入滅236年第3回仏典結集後、アショーカ王の命によりインドから仏教布教のために長老が訪れた。その時、布教僧たちがモン族の王にパヤーを再建、修復するように説いた。以来、モン族の王がシュエダゴン・パヤーを修復するようになった。

時は進み、1362年にバゴーの王ビンヤ・ウはパヤーを改修し、22mまでに高めた。15世紀中期、女王シンソープは現状とほぼ等しいものに改修した。彼女は自分の身体と同じ重量(40kg)の純金を寄進して、薄板に加工しパヤー全体を金色で装飾した。その後、この行為は多くの王族によって繰り返されることとなった。

シュエダゴン・パヤーには見どころがいっぱいあり、とても1度の訪問ですべてを回りきれものではない。

なかでも、北入口の東側にあるナウンドウジー・パヤーは、ひととき多くの参拝者で賑わっている。ここは、伝説の8本の聖髪が仏塔に収められる前に、最初に安置された場所と言われている。このパヤーは兄さんパヤーと言われ、大パヤーのミニチュア版の形をしている。

ミャンマーの伝統暦は8曜日制を採っており、水曜日が午前と午後の2日になるが、各曜日には方角、シンボルとなる動物、星などが割り振られている。境内には各曜日の守護神を祀っているコーナーがあり、善男善女が一心に祈念して水をかけている様子が見られる。自分の誕生日の曜日を前もって調べ、該当する神さまにおまいりするのも旅の良い思い出になるであろう。

北入口と西入口の中間辺りには、マハガンダの釣り鐘がある。このブロンズ製の釣り鐘は、1825年第一次英緬戦争の時にイギリス軍の戦利品となり持ち運ばされそうになったが、舟がヤンゴン川に転覆し沈んでしまった。イギリス兵の能力ではどうしても浮かび上がらせることができなかった。けれども、ミャンマー人の僧侶の叡知によって、見事浮上させることができた。その具体的な方法は明らかになっているが、ここでは秘密にしておこう。鐘の重さは23t、高さ2.2m、口径1.95mである。

さらに大きな釣り鐘がナウンドウジー・パヤーの南側にある。この釣り鐘はマハテ ISSAダの釣り鐘と言ひ、重量42t、高さ2.55m、口径2.3mである。

しかし、何と言っても参拝に来ている人たちの様々な表情を眺めていることほど、興味深いことはない。国中から多くの人たちがやって来ており、祈ったり、瞑想したり、昼寝をしたり、弁当をひろげたりなどの様子は、日本の寺社参拝と違う明るい雰囲気である。

イ スーレー・パヤー

シュエダゴン・パヤーをヤンゴンの「魂」とするならば、スーレー・パヤーはヤンゴンの「心臓」と言ってもよい。ダウンタウンの中心にあり、高さ48mの八角形のパヤーは、昼は太陽の光、夜は照明によりライトアップされいつも光り輝いており、ヤンゴンのランドマークとなっている。創建は古く、2千年以上の歴史があり、釈迦の聖髪が安置されていると信じられている。



ウ ボータタウン・パヤー

ダウンタウンの西南部、ヤンゴン川沿いにボータタウン・パヤーがある。ポーは「兵士」、タタウンは「1千」を意味する。千年以上も昔のこと、インドから仏陀の遺品を僧侶が携えやって来た。その護衛に当たっていたのが1,000人の兵士、ボータタウンである。仏陀の遺品は護衛兵に守られ、大勢の人々に畏敬の心をこめて受け取られた。

このパヤーは、第二次大戦の時に爆撃を受けてしまった。改修工事を始めると、瓦礫の中から数多くの遺品が現れ、聖髪など釈迦の遺品と思われるものが多数発見された。

このパヤーは内部が回廊になっており、モザイク状の小さな鏡がはめ込まれた壁面により、迷路のような気分になる。パヤーを外から眺めるものとばかり考えていた身には、新鮮な感動を覚える。

エ チャウタッジー・パヤー

高さ17.7m、長さ65.8mの巨大な寝釈迦像が、シュエダゴン・パヤーの北東徒歩で約20分の所にある。20世紀初頭1909年に建立されたもので、歴史はそんなに古くはないが、その大きさと、たおやかな面差しが感動を与える。

足裏には彫刻がなされており、合計で108個の樹目にはそれぞれ古代仏教の宇宙世界などが描かれている。鉄骨の建物の中に横臥しているため、モンユワ（95m）やムドン（170m）にある巨大な寝釈迦像に、引けを取らない大きさを感じさせる。



オ ボージョー・マーケット

ヤンゴン最大のマーケットで、ボージョー・アウンサン通りに面し、複合ビルFMIセンターの隣にある。イギリスの統治時代はスコット・マーケットと呼ばれていた。屋根は淡いピンク色、白い壁の瀟洒な外観であるが、内部はやや薄暗く、各店舗が雑然として張り付いている。

衣類、雑貨、民芸品、骨董品、宝飾品など、お土産にするようなものはあらゆる種類の物が揃っている。建物内部の店は小さく区割りされているが、道路に面した店舗は比較的大きく、宝石店、木彫り製品、漆商品の店など土産商品や、ファッション関連の店が並んでいる。

ミャンマー人は正直の人が多いため、よその国で見られるようなふっかけた価格の店はほとんどない。しかし、価格交渉の余地は多分にあり、店によっては値引き要求に応じてくれる。今後、日本人客が何人も来るようなことになる、丁々発止になるかも知れない。「ゼェ ショー ナイン ダラー（安くできますか）」、「ゼ



エ ショー パーバ (安くして下さい) 」などと言っていると、少々安くしてくれるかも知れない。

カ 宝石博物館

インヤ湖の北東、ガバエー・パヤーに近接して宝石博物館がある。4階建ての建物で、1階から3階までが宝石のショッピング・フロア、4階が博物館になっている。博物館では、ミャンマー産のルビー、サファイア、翡翠、ペリドット、真珠などが展示されており、宝石について詳しくなれそうである。ショッピング・フロアには、何十店もの宝石店が営業しており、価格交渉など、ゆったりと買物が楽しめる。

(2) ヤンゴン近郊

ア チャイッコー・パヤー

チャイッコー・パヤーは、ヤンゴン南、タンリイン町の南約3.2kmの山の上に建っている。このパヤーは約2300年前にタトンのモン王達によって建てられ、仏陀の6本の聖髪と額の一部の骨が祭られていると信じられている。現在の形になったのは600～800年前のことで、高さは56.4mである。

イ イェーレー・パヤー

タンリインの南12km、川の中程にイェーレー・パヤーがある。このパヤーは①基壇が決して洪水に流されないこと、②基壇は礼拝者すべてが入れるぐらいの大きさであること、③寄進者がすべて裕福になることという3つの聖なる誓いから建てられた。



1271年に法律家のウ・バトゥンとその妻ドー・テが夢を見て、この地にやって来た。彼らは小さなパヤーが壊れているのを見て、現在のような4段の基壇のある15.5mの高さのパヤーを再建したものである。

ウ トゥワンテー

トゥワンテーは、ヤンゴンから汽船で、2時間ほどで行くことができる運河に沿った小さな町である。運河の船旅はそれだけでも楽しいものであり、ミャンマーの田園風景を見る良い機会でもある。トゥワンテーは陶器づくりでもよく知られている。

2 バガン



ミャンマーにおいて最も驚嘆する所として、多くの人は旧都バガンの遺跡を第一に挙げることであろう。エーヤワディ川の東岸、**42平方km**に及ぶ荒涼とした大地に、現在**2,300**を超えるパヤーやパトー、僧院などが点在し、一部は往時さながらに、また一部は朽ち果てた様を見せている。カンボジアのアンコールワット、インドネシアのボロブドゥールと並んで、**世界の三大仏教遺跡**の一つに数えられている。

バガンは、ピュー族の王タムダリッが西暦**107年**エーヤワディ川の岸辺のヨルチュンと呼ばれる所に在った**19**の村々を統一して、都を造ったことから始まると伝えられている。バガンの都は**4度**も移され、現在のバガンは第**4番目**の王朝の地域内にあると伝えられている。バガンを支配した歴代の王の中では、第**4番**王朝の**アノーヤター王**が最も有名で、強力な王であった。

アノーヤター王（在位**1044～1077**）に始まるバガン朝は、**1044年**から元のフブライハンによって**1287年**に滅ぼされるまで、約**230年**間に亘って**11代**続いた。バガン朝は、バマー族最初の統一王朝であった。

バガンはマンダレーから南西に**193 km**の所にあり、年間の平均降雨量は**640mm**に過ぎない。ちなみに、東京は**1530mm**である。赤茶けた大地に展開する遺跡の数々は、見渡す限りの仏塔群で圧倒させられる。主なパヤーやパトーだけでも**40以上**もあり、一度の訪問ではとても回りきれものではない。**1975年**の大地震によって多くの遺跡が多大な被害を受けたが、現在ではほとんどが修復を終えている。

(1) ニャンウー、ウェッチーイン地区

ア ニャンウー・マーケット

ニャンウーはバガン地区で一番開けた町で、交通や交易の要所となっている。マーケットでは、各種食料品、衣料品、家庭道具などあらゆる種類のものが売られており、終日開かれている。この地域の土産品も数多くの品が展示されている。マーケット内は雑然としており、値引き交渉にも十分応じてくれる。このマーケットはミャンマーで一番観光慣れをしており、多くの売り子が日本語で攻勢をかけて来る。近年韓国からの観光客が増え、多くの韓国人が日本人と間違えられ、日本語で話し掛けられている様子が滑稽でもあり、愛嬌である。

イ シュエズイーゴーン・パヤー

バガンを代表する大パヤー。シュエズイーゴーンは、ミャンマーで最も崇められているパヤーの一つで、**仏陀の遺骨と4つの聖歯**が納められていると信じられている。パヤーの建設は1031年にアノーヤター王によって始められ、1090年にその子チャンシッター王の治世に完成した。

シュエズイーゴーン・パヤーは3段の基壇、鐘状の輪環を持ち、上向きと下向きの蓮の花弁、天上へ向かう階段がある。シュエズイーゴーンは、その後数多くのミャンマー・パヤーの原型となった。シュエは黄金、ズイーゴーンは砂の川岸を意味する。シュエズイーゴーンには、大小さまざまな黄金の釈迦像が納められており、境内も大変広く見上げる塔の見事さにうっとりとする。



ウ ティーロミンロー・パトー

ティーロミンロー王によって、1218年に建立された2階建ての赤いレンガ造りのパトー。高さが46mあり、バガンで二番目に大きいパトーで、1階と2階部分には各4体の仏像がある。

(2) オールドバガン地区

ア タラバー門

九世紀に造られた城門で、今に残る僅かな**城壁の名残**である。門の両側には、バガンを守る兄妹神の「ナッ」が祀られている。最近修復され、コンクリート製の階段が調和を乱すがごとく改修された。

イ アーナンダ・パトー



バガンで最も優美で、最も人気のある大パトー。タラバ門の近くにあり、チャンシッター王によって1091年に築造された。

本堂の一辺は53mの正方形で、四つの入口がある。高さ51m、夕日に映える金色の尖塔の美しさは目を見張らばかりである。

本堂の東西南北には、高さ9.5mの黄金の仏像が納められている。南北の二つは建立時のものである。西面は釈迦牟尼仏、北面は拘留孫仏、東面は拘那含牟尼仏、南面は迦葉仏である。また、釈迦の生涯を表した80個の浮き彫り彫刻も注目すべである。

ウ マハボディ・パヤー

マハボディ・パヤーは、インドのブッダガヤの同名の建造物を模して建てられたもので、ミャンマーで見られる数少ない様式の建物である。ピラミッド状に細長くそびえる尖塔は、仏像が納められた多数の小さな祠で覆われている。

エ ブーパヤー

エーヤワディ川の岸辺に建つ小さな円形のパヤー。エーヤワディ川を上り下りする舟の目印となっている。バガンで最も古いパヤーで、ピュー様式を伝えていると言われている。このパヤーは、ピューゾーティ王が、巨大な瓢箪の蔓を取り除いたことを

記念して建てられたものである。ブーパヤーとは「瓢箪のパヤー」の意味である。

オ ゴードーパリン・パトー

バガンで二番目に高いパトー。伝説によればナラパティシトゥ王が祖先の人々に対して行った悪口の罪を悔い、この土地で祖先に敬意を表して、ゴードーパリン・パトーを建立したと言われている。

タツピンニュ・パトーに似ており、高さは55m。本堂内の回廊には、4体の金箔で覆われた仏像が祭られている。夕陽を見るには絶好の場所であったが、建物の保護のために、現在では上層階に上ることは禁じられている。

カ シュエグジー・パトー

アラウンシトゥ王によって1131年に建てられたパトーで、少し小さい建物であるが、優美なたたずまいを見せている。内部の壁面には美しい化粧漆喰の彫刻の跡がある。また、パトー建立の経緯が記された石板もあり、完成までに7か月を要したと刻されている。

キ タツピンニュ・パトー

バガンで一番高いパトーで、高さは61m。1144年にアラウンシトゥ王が建てたものである。何となく日本の国会議事堂に外観が似ており、他を圧倒する貫録が感じられる。タツピンニュとは「全知」を意味すると言われている。

暗闇の中にライトアップによって浮かび上がる塔は、大変美しいものである。このパトーの隣には木造の僧院があり、境内には第二次大戦の日本軍兵士の慰霊碑がある。



ク シュエサンドー・パヤー

1057年モン族の都タトン征服後、アノーヤター王によって建立された。バゴダの内部には、モンに伝わる釈迦の聖髪が納められていると信じられている。パヤーは5層からなる基壇を持ち、急な階段を登りその上層階から眺める全景と夕日は、見事で感動的である。

ケ ダマヤンジー・パトー



バガンで最も大きいパトー。父と兄を暗殺して王位についたナラトゥ王によって建立された。建設途中でナラトゥ王もまた暗殺されたため**未完**に終わっている。一説によると、現在でも夜になると**幽霊が出る**といわれおり、地元の間人も、夜間には恐くてなかなか近づかないそうである。

レンガ造りの緻密な細工の寺院で、かっちりとした6層からなる基壇には、それらの間を途切れなく続く、真っ直ぐに伸びた急勾配の階段がある。また、建物の内部には仏像や壁画が数多く残されている。

コ スラマニ・パトー

1183年、七代目の王ナラパティシトゥによって建てられたパトーである。建物は2階建てになっており、1階には、東西南北に赤く塗られた4体の座像が納められている。内部の壁面や天井には、仏伝図や釈迦の前世を描いた**本生図**が残されている。

サ ミンガラゼディ

バガン王朝最後の**大パヤー**で、プロポーションの良さで知られている。3層の基壇からなり、壁面には釈迦前世物語**ジャータカ**を題材にして描写された粘土板がはめ込

まれている。最上階からの眺望は絶景で、目を見張るような光景が広がる。上階まで上ることが許されている数少ないパヤーであったが、現在では建物保護のため上ることができなくなっている。

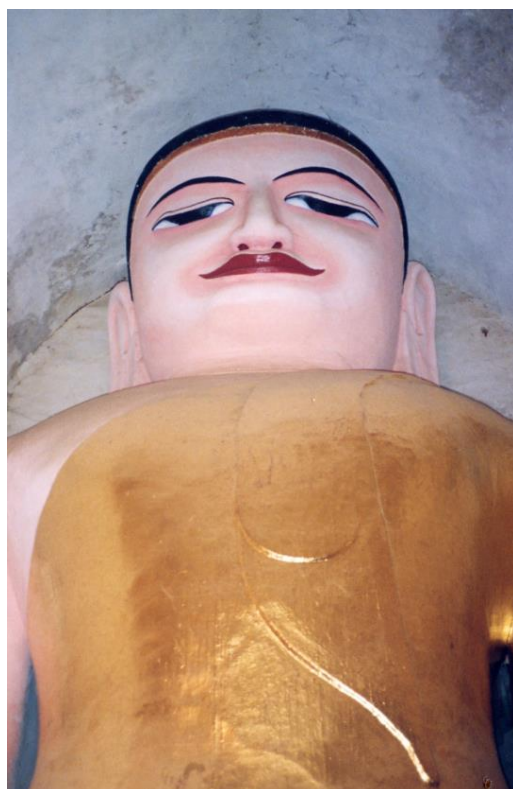
シ バガン博物館

ゴードーパリン・パトーの隣にあり、数多くの仏像や財宝が展示されている。ミャンマーのロゼッタストーンと言われる**ミヤゼディ石柱**が展示され、古ミャンマー語、モン語、パーリ語、ピュー語の四つの言語で、同じ内容の文章が刻まれている。同様の石柱が、もう一つミヤゼディにもある。

(3) ミンガバー地区

ア マヌーハ・パトー

マヌーハはモン王国タトンの王で、アノーヤターとの戦いに敗れてバガンに連れて来られた。マヌーハはパトーを建てることを許され、財宝を売り払って1059年にこのパトーを建立した。建物の随所には**屈折した王の気持ち**が表れているといわれ、3体の座像と1体の涅槃仏が安置されている。どれも窮屈そうな空間に納められている。



イ ナンパヤー・パトー

ナンパヤー・パトーは、砂岩とレンガでもって建てられたバガンで唯一の建物で、パトーの内部には古代インドの創造神、**梵天の浮き彫り**が施された四つの石柱がある。梵天は、組み合わせされた灰色の砂岩のブロックに刻され、カンボジアのアンコールワットで発見された彫刻とよく似ている。

ウ アベヤダナ・パトー

チャンシッター王の**第一王妃**、アベヤダナの名前に由来する堂々たるパトー。内部には釈迦の大きな座像があり、回廊の外壁には、菩薩もしくは未来の仏陀の浮き彫りが、内部の壁面にはインド神話の梵天、ヴィシュヌ、シヴァ、帝釈天の浮き彫りがある。

エ ナガヨン・パトー

チャンシッター王によって建てられた**ミンガバー村で最も優雅なパトー**。通常は、

維持保存のため閉められている。兄ソールの怒りをかわすために造った建物で、回廊の小さい祠には仏陀の物語が刻された浮き彫りがあり、壁面は色彩で装飾されている。

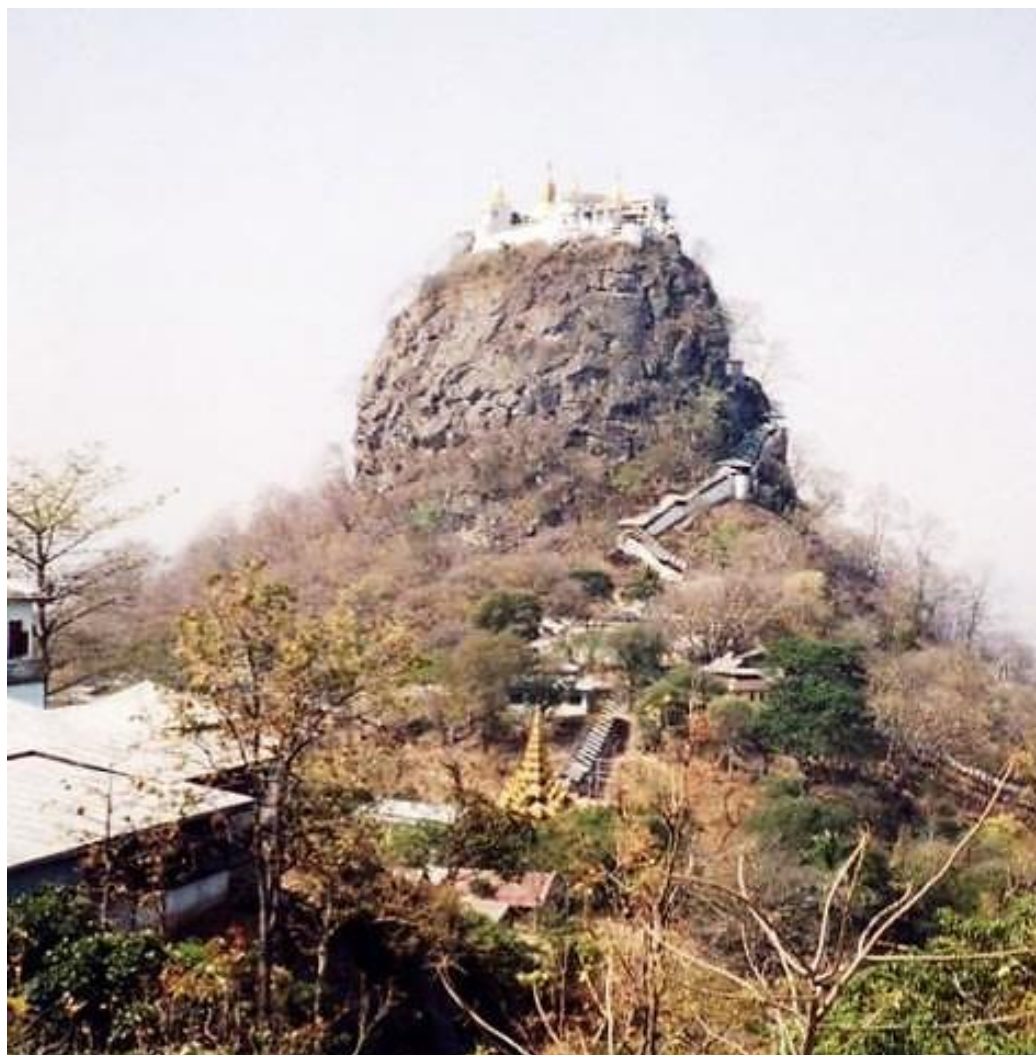
(4) ミンナントゥ地区

ア パヤートンズー・パトー

三つの小さな塔の組合せから成るパトー。仏陀、仏陀の教え、僧伽（僧団）を表現していると言われている。13世紀後半に建立。フブライハンのバガン侵略があり、間もなくして見捨てられた。建物のデザインは、タイに残存するクメール仏教様式とよく似ている。仏陀を題材にした多くの壁画が残っている。

(5) バガン近郊

ア ポパ山



バガンの南東約50 k mの所にポパ山がある。標高1518m、40平方 k mの山城を持ち、平原の中に孤立しているので実際以上に高く見える。ポパ山は死火山であり、多くの峡谷を持っている。山自体はワイン・グラスの形をした高原部門と主峰の2つからなっている。地形学者の研究によると、この山は少なくとも200万年から300万年前にできたものだと言われている。

ポパ山は、霊山故に雨雲を呼び寄せることができ、そのために、裾野の平原は乾季が進むと草木も生えない程になるが、山は青々とした緑の樹木で常に覆われている。

ポパは「花」を意味するサンスクリット語で、「花の山」の意となる。また、別名マハーギリ山、すなわち「大いなる山」とも呼ばれている。

ポパ山の中腹には、噴火によってできた標高736mの「小ポパ」が天に向かって奇妙な形でそびえている。山頂には、民間信仰の精霊ナツが祭られており、ナツ信仰の総本山となっている。山門から頂上まで往復約1時間、参道にはおみやげ屋が数多く並び、日本の金比羅山の参道のようなものである。

イ サレー

サレーはバガンの南約40 k mの所にある。バガン朝後期、とりわけ12世紀～13世紀の影響を受けて発展した所であるが、今日では、サレーはバガンよりも宗教的に重要な地位を占めている。

英国統治時代のコロニアル様式の古い建物や、日本の援助でできた肥料工場もあるが、**静寂で寛いだ雰囲気**を味わうことができる。

バガン時代の遺跡は**庶民や平民**によって建てられたもので、バガンのアーナンダ、タッピンニュやダマヤンジーなどのような大きな建造物はない。後期のものは、インドのブダガヤにある寺院をモデルにした、同名のバガンのマハボディから影響を受けている。

域内には**展示館**となっている**僧院（ヨーッソン・チャウン）**もあり、建物の外部にはジャータカ（釈迦前世物語）やラーマーヤナを主題とした**ティーク材の彫刻**が見られる。ミャンマー最高の専門職人の技をここで見ることができる。

サレーの南5 k mの所には**広大なシンピンサチャー寺院**があり、**450m続くティーク**



材の柱廊が見られる。お坊さんの瞑想センターにもなっており、お祭りの日には各地から巡礼者や露天商がやって来て賑わう。境内には、重要文化財にもなっている壁画がある。

3 マンダレー

マンダレーはゴールデン・シティ、そして上ミャンマーの中心都市として知られている。現在の人口は100万人を超え、ミャンマー第2の大都市である。

マンダレーはそんなに古い都市ではなく、その歴史はわずかに160年余りに過ぎない。ミンドン王によって**1857年**に造営された比較的若い都市である。マンダレーはミャンマー**最後の王朝**のあった所で、それ故に、同市とその周辺は多くの名所旧跡に恵まれている。マナムニ・パヤー、王城、アトウマシー・チャウン、クトドー・パヤー、マンダレー・ヒル、ゼェジョー・マーケット、ヤンキン・ヒル、ウ・ベイン橋、ピンウールイン（旧名メイミョ）等々である。

マンダレーは、ヤンゴンと比べると中国の国境に近く、中国商人の影響が強まっている。また、日本の京都人のように、住んでいる人たちのプライドがやや高いように感じられるのが興味を引く。

(1) マンダレー市内

ア マナムニ・パヤー

市の南側、中心部から約3 kmの所に、マナムニ仏の仏像が坐している。マナムニ・パヤーは仏塔ではなく仏像であるが、偉大なる仏像を意味するパヤージーとも言われている。また、1784年にラカイン国から持って来られたため、**ラカイン像**とも言われている。

座った姿勢の高さは**3.8m**。マンダレーでは最も有名なパヤーであり、国中の仏像の中で唯一**仏陀の魂が像に宿っている**と信じられている。伝承では、この像は釈迦の在世中に造られ、釈尊が7度も抱きしめて命を吹き込んだと言われている。そのため、敬虔な仏教徒はそれを「いのち」あるものと考え



え、神聖な生き仏マハムニとして崇めている。

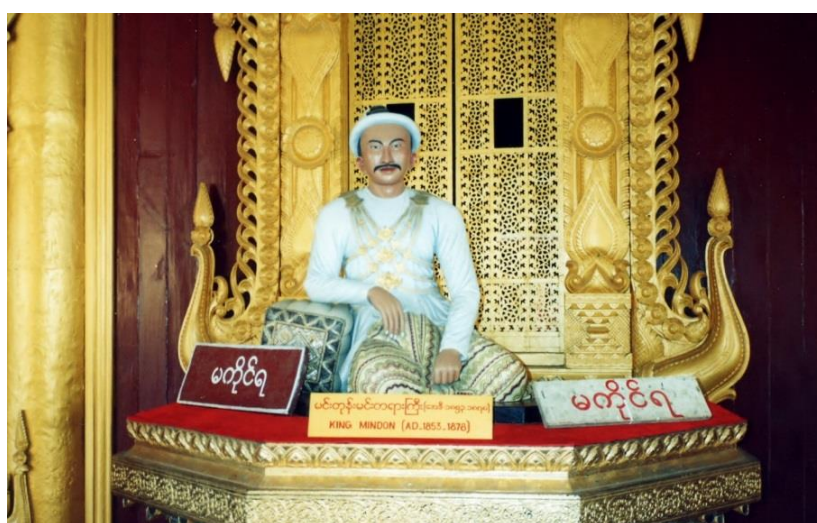
したがって、マハムニ・パヤーを参拝しないことは、マンダレー訪問が不完全であったことを意味する。仏像の写真撮影は長い間禁止されていたが、現在では許されている。参道には真鍮製の仏像のみやげ店など、仏具関係の店が数多く並んでおり、大切な参拝みやげとして多くの人を買って帰る。

また境内には、アンコールワットのものといわれるブロンズ製のライオンや兵士の像があり、自分の身体の悪い部分を撫でると治癒すると信じられている。余りにも多くの人さわるので、その部分がテカテカしている。

イ 王城

ミンドン王はいにしへの仏陀の予言に従い、旧都アマラプラからマンダレーに遷都した。

王城は正方形に形づくられており、外壁は東西南北に向いている。壁には**12の門**があり、それぞれ十二宮の名前がつけられている。外壁の各辺の



長さはおおよそ **2 km** で、高さは5.5mあり、壁に沿って168m毎に監視塔が造られている。

王城の中心には、「**獅子の部屋**」と呼ばれた玉座の広間があった。その上には、金箔で覆われた高さ78メートルの7階建ての搭がそそり立っており、この搭を通して、王様の意思決定を助けるために玉座の上に宇宙の叡知が燦々と注がれていた、と信じられていた。

城壁の外側は平民と「外人」の居住地として、マーケット、職人の仕事場、各商店が立地していた。現在の王宮は、第二次世界大戦の時に焼失したため、再建されたものである。

ウ アトゥマシー・チャウン

アトゥマシー・チャウン（文字どおりの意味は**比類なき僧院**）もまた、訪れるべき価値のある所である。たしかに、1890年の火災によって大部分が失われたが、再建され、今日でもたぐい希なその全盛期の面影をとどめている。その絢爛さは息を飲むようである。

エ クトドー・パヤー

ミンドン王は、バガンのシュエズィーゴーン・パヤーを模して、1857年にクトドー・パヤーを建立した。同パヤーは、マンダレー・ヒルの南東階段の基部の近くにあり、注目すべきものは、仏教の聖典ティピタカ（三蔵經典）が彫られ、小さな御堂に収納された**729枚の大理石の石板の仏典**である。三蔵とは 律（ウイヤ）、經（スツ）、論（アビダマ）を指す。

ミンドン王は、異同無き教典をつくるため、重大な仕事は自ら監督して大理石板にそれを刻した。同石板は「**世界で最も大きな書籍**」として認められており、全文を読むには、1日8時間読むとしても、450日かかると見積もられている。

オ チャウットーギー・パヤー

マンダレー・ヒルの南側のふもとには、バガンのアーナンダ寺院を模した、ミンドン王によって1853～78年に建てられたチャウットーギー・パヤーがある。仏像は**巨大な大理石の一枚岩**から彫りだされたものであり、仏殿の外側の壁に面しては**各面20体**からなる**八十羅漢**、もしくは釈尊の偉大な弟子たちの彫像がある。石像の彫刻は1865年に完成した。石仏は、マンダレー北郊48kmの所にあるサジン山から1万2千人の人力で、13日間掛けて運ばれたものである。

カ マンダレーヒル

マンダレー・ヒルの夕陽の影は、マンダレーの街を覆い、特異な景観を与えながら広がって行く。山頂に立ったその時、**眼前に広がる壮麗な光景**を見ることができる。手前は、木で造られた尖塔のある旧王城の銃眼を設けた壁、かなた、遠く青いシャン高原の長く続く稜線。

丘の上のパヤーと僧院は、隠僧者ウ・カンティの献身的な行為と、大衆の自発的な浄財によって建立されたものである。

マンダレー・ヒルからは市街地を一望でき圧巻である。現在では、すでに道路の建設は完了しており、容易に車で山頂まで行くことができる。夕刻ともなると多くの人が集まって来るので、夕日を見るための場所を確保することが肝心である。



キ ゼェジョー・マーケット

マンダレー最大のマーケットで、日用品や食料品、絹織物などの店がぎっしり集まっている。各商品毎に同業種の店が多く集まっており、欲しい商品を探すのは比較的容易である。店内にはエスカレーターがあり、地方からやって来たお上りさんが、おっかなびっくりで乗る様が愛嬌であった。ビクトリア女王を記念して建てられた**時計塔**が目印になり、マーケットの東側ブロックには、毎晩無数の露店が店を開く。屋台、菓子売り、雑貨売りなど、見て回るだけでも楽しいものである。

ク ヤンキン・ヒル

王城から東約3kmの所にヤンキン・ヒルがあり、夕日を見る絶好のスポットとなっている。

マンダレー・ヒルと違い、ヤンキン・ヒルでは写真の撮影料は必要ない。観光客もほとんどやって来ない。

(2) マンダレー近郊

ア アマラプラ

アマラプラは、ボードウパヤー王によって**1783年**に造営されたミャンマーの**旧都**である。マンダレーの南約11km、ザガインに向かう道路上に位置しており、人口は1万人。主要な産業は、木綿と絹の織物工場である。パトドージャー・パヤー、チャウツトージャー・パヤー、バガヤ僧院、タウンタマン湖、ウ・ベイン橋など多くの見どころがある。

◆パトドージャー・パヤー

パトドージャー・パヤーはマンダレーの南西、エーヤワディ川の川岸にある。バジードー王によって、1820年に建てられたものである。下層の段台には、ジャータカ（**仏陀の前世物語**）の場面が描かれた大理石板があり、上階の柱廊からは、**眼前に展開する田園地帯**とエーヤワディ川の素晴らしい光景を見ることができる。石碑にはパヤー建築の由来が記されている。

◆ウ・ベイン橋

アマラプラには、1784年にできた、タウンタマン湖に架かるウ・ベイン橋と呼ばれる有名な**ティーク材**の橋がある。ウ・ベインは、インワからアマラプラに都が移った時の「行政長」で、廃墟となったインワ宮殿からこの長い歩道橋を造るために廃材を運び、巧妙に再利用した。

橋は2世紀に及ぶ時の試練に耐えており、現在に至るまで利用されている。橋は若干の修復を除いては、新しい様式のように架かっている。ウ・ベイン橋はミャンマーで最も長い木造の橋であり（橋の高さ10m、長さ1.2km）、乾季の間は、橋は干からびた大地を渡っており、雨季になると、湖は水で満ち水面は橋のすぐ下となる。



イ インワ

インワはアマラプラの南西、エーヤワディ川とミイソング川の合流点に位置している。インワは、**1364年**にシャン族のタドーミンビャ王によって築城され、その間、他の土地にその地位を何度か譲ったことがあったものの、約400年間王朝の所在地であった。現在は、城壁に囲まれた旧市街に、いくつかの寺院やパヤーが残るだけのひなびた村となっている。

◆インワ橋（ザガイン鉄橋）

エーヤワディ川に架かる大橋で、全長 732メートルの鉄橋。英国によって1934年に造られ、第二次世界大戦の時、日本軍の侵攻をくいとめるために英国軍によって破壊された。現在は真ん中が鉄道、両側が有料の自動車道となっている。戦術的な意味があり、写真撮影は禁止されている。

◆メヌのレンガ僧院（マハ・アウンミエ寺院）



時の試練に耐えたインワにおける大変美しいレンガ造りの僧院。ミャンマー文化の主要部分である宗教信仰の代表的な建物である。この僧院を訪ねることにより、昔の時代の感慨にひたることになることであろう。

荘大さを誇った王宮の数少ない残存物のうち、最も有名なものがこの王妃メヌのレンガ僧院である。美しい化粧漆喰で飾られた建物は、伝統的な木造様式を模して造られているがために、オーク・チャウン（オーク材の僧院）とも言われている。

1818年に、1819～1837年間インワを治めたバジードー王の第一王妃、ナンマドー・メヌによって建てられたものである。

この僧院は、マンダレーに滞在する間に、一度は訪れるべき所といわれている。これにより、往時のミャンマー技術の粋とミャンマー建築の多くを学ぶことができる。

ウ ザガイン

ザガインは、ミャンマーの宗教の一大中心地として広く知られている。

ザガイン・ヒルを中心に、周辺には600に上るパヤーと僧院が点在しており、3,000人を超す修道僧が生活している。ザガイン地区にはおおよそ100の瞑想センターがある。

◆ザガイン・ヒル

ザガイン・ヒルは、その名が示すようにザガインの市内にあり、僧や尼僧が瞑想を行い、世俗を離れた生活を送っている。ザガイン・ヒルは敬虔な修行者だけではなく、静かで穏やかな生活を送りたい人にとっても魅惑的な場所といえる。

600m級の山々が連なる丘に数多くのパヤーや僧院が建ち、ミャンマーを凝縮した光景と言われている。第二次世界大戦の、日本人戦没者慰霊塔がいくつも建っている。

ザガイン・ヒルは曲がりくねったエーヤワディ川を望み、山頂からは一大パノラマを楽しむことができる。頂上にあるパヤーは、いにしへのミャンマー王朝とその臣下の人々の信心深さを象徴している。



◆スーンウボンニャシン・パヤー

スーンウボンニャシン・パヤーはザガイン・ヒルの中で最も有名なパヤーで、西暦1312年にピンヤ国の都を築いたタジーシンティハトゥ王と、1315年にザガインの王都

を築いたアティンカヤソーユンの部下であったポンニャの領主によって西暦1286年に建立された。

パヤーは山々の最高地点に塔のように建っており、ここから近郊のザガイン、エーヤワディ川、東方のマンダレー、アマラプラ、インワおよびシャン高原、さらには西側のムー溪谷を望む大パノラマを楽しむことができる。

◆ウミン・コーゼ（90の洞窟）

ザガイン・ヒルのポンニャシンの東にある3番目に高い山の上にウミン・コーゼがある。この洞窟は、インワの王ミンガウンジーが建てた4つのシンボー祠堂の1つで、現在そのうちの2つは朽ち果てしまっている。ウミン・コーゼ（すなわち90の洞窟）は、丘の上にあるたくさんの洞窟にちなんでその名を付けられた。



伝承によれば、

王はザガイン山中に暮らす高名な隠僧者を訪ねるために象に乗ってやって来た。象は聖なる菩提樹の葉っぱを食べようとしたため、倒れて意識を失ってしまった。このため、王は王室の象と同じ値段(Sin Boe)のパヤーを建てなくてはならなくなった。この乱暴ものの象は生き返り元気になった。これが、象の値段のパヤーと呼ばれるゆえんである。

◆ゼタウン・パヤー

ゼタウン・パヤーはザガイン・ヒルで最も古いパヤーといわれている。現在の高さは29.6mで、エーヤワディ川を見下ろすことができる。

およそ2570年前に、仏陀とその弟子アーナンダがこの地に来て1週間滞在した。この丘に棲む99人の人食い鬼は改宗して、お釈迦様の説法を聞く聴衆となった。彼らの頼みによって仏陀は黄色の衣を与えたので、彼らは尊い法衣を祭るパヤーを建立した。鬼のリーダーの名はゼタといい、彼らの住んでいた森をゼタウンナという。



◆カウナムード・パヤー



ザガインで最もよく知られたパヤーで、町から北へ10kmの所にある。巨大なドーム状の高さは46mで、その形状が婦人の乳房によく似ていることから、**オッパイバゴダ**の愛称で親しまれている。壁はバマー文字、モン文字、シャン文字で説明のある仏陀の誕生を描いた絵画で装飾されている。

1636年に、タウンゲー朝5代目のタルーン王によって建立されたといわれている。かなり広い境内で、今後外国人観光客の増加により、周辺の光景が一変してしまうようになるかも知れない。土産物屋が境内にある。

オッパイパゴダの別名のように白い肌の仏塔であったが、現在では金色になっており、以前行ったことのある人は違和感を覚えるかもしれない。

エ ミングオン

ミングオンはマンダレーの対岸、エーヤワディ川の上流約11kmの所にある。マンダレーからは陸路ではなく、川を船で行くことになるが、その小さな船旅は十分な楽しさを与えてくれる。ミャンマーの、**躍動的な動脈交通の様子**を観測できるからである。

ミングオン自体は小さなのどかな村で、マンダレーからはちょうど良い日帰りコースになっている。

◆ミングオン・パヤー（ボードウパヤー王のパヤー）

このパヤーは、完成していたらおそらく世界で一番高いパヤーになっていたはずである。高さは152mに計画されていた。しかし、コンバウン王朝を築いたアラウンパヤー王の四男、**ボードウパヤー王の死**（1819年）によって**未完**に終わってしまった。

1838年の地震によって損傷を受けたが、現在の高さは50m、レンガで造られた方形の基盤部の各辺137m、台座の各辺は72mである。崩壊が徐々に進んでいる。

◆ミングオンの大梵鐘

大梵鐘の重さは87t、高さ3.7m、口径5m。1790年、ボードウパヤー王は大きなパヤーに釣り合うように、**巨大な梵鐘**を鑄造した。

亀裂の入っていない鐘では現在世界一の大きさで、モスクワにある鐘が最も大きいといわれているが、亀裂が入っているそうである。

梵鐘は、現在小さなお堂に釣られていて、鐘の下をくぐることができる。あなたが内部から鐘の音を聞くことができると、周りの何人かの人がゴーンと鐘を鳴らすことでしょう。この鐘は余りにも大きく、叩いた位では耳は痛くならない。



オ ピンウルウィン（旧名メイミョ）

ピンウルウィンは、植民地時代の旧名メイミョとしてよく知られている。メイミョは、第三次英緬戦争時の英国のメイ大佐の名にちなんで付けられたものである。ミョは町を意味する。

ピンウルウィンはマンダレーから東へ67k m、海拔 1,070mの所に位置し、英国の植民地時代は避暑地として栄えた。豊かな緑とビクトリア様式の重厚な建物が、落ち着いた雰囲気醸し出している。英国式の古い建築様式が旅行者の魅力になっている。町の標準的な交通機関は、驢馬が引く小さな箱形の四輪馬車であったが、姿を消しつつある。町の中心部には時計塔があり、観光客相手のお土産屋が並んでいるが、喧騒な感じは余りしない。

ピンウルウィンの近郊には滝や洞窟などがあり、魅力を一層高めている。

◆マハ・ナンダム洞窟

ピンルウィンから東27k mの所にマハ・ナンダム洞窟がある。一般的には、ペイチンミャアウンという名前で知られている。洞窟内にはミャンマー各地の仏像や仏塔のイミテーションや、仏陀の生涯を描いた場面、仏陀が説法している様子などが、実物のような形で無数に造られている。インレー湖近くにもピンダヤの洞窟があり有名であるが、アトラクション性ではこちらの方が興味を引く。

